

## 海軍ニュース：中国がカタパルト発進訓練施設を建設

漢和防務評論 20160203 (抄訳)

阿部信行

(記者コメント)

中国は、遼寧省興城にカタパルト発進訓練装置を建設しました。現段階では中国海軍艦載機 J-15 の見通しがきかなくなっていますが、バックアップシステムの建設は先行して行われています。

中国国産空母について、大連空母は遼寧号に同じくスキージャンプ発進のみで、江南空母はカタパルト搭載のようです。江南空母の細部は明らかになっていませんが、漢和は、カタパルト装置とスキージャンプ台の両方を装備する可能性を指摘しています。

J-15 がキャンセルになった場合、中国は艦載機をどうするのか。次期艦載機を開発するまで港に係留することになるのでしょうか？或いは娯楽施設に転用するとか？

ロシアに泣きついてもうどうにもなりません。最後のオプションは西側から中古のハリアーを購入することですが売ってくれる国は無いでしょう。

**KDR 香港特電：**

種々の動向から、江南造船所で建造中の空母に採用されるカタパルト装置は、現在迅速に準備が行われていると判断される。興城の中国海軍艦載機訓練基地には、3番目の滑走路が建設中であり、権威筋によると、これはカタパルトの試験施設であるという。

中国は、2008 年からひたすら電磁カタパルトの試験を行ってきた。かつ全寸模型も製作した。興城に建設されるカタパルト装置は、電磁カタパルトなのか？或いは蒸気カタパルトなのか？現段階で明確な結論を出すことはできない。KDR は、蒸気カタパルトの方に傾いているが。中国は、ウクライナからソ連時代に開発された蒸気カタパルト技術を手に入れた。このカタパルトは、NITKA 試験飛行センターにおいて建造中にソ連が解体したため、飛行試験を行ったことはない。しかし NITKA はソ連製カタパルトの設計図を持っていた。

確定出来ることは、江南造船所が建造する空母はカタパルトを採用するという事である。通常の下で電磁カタパルトを空母に載せたならば、核動力型空母は十分な電力供給ができる。電磁カタパルトは蒸気に比べ、何倍も電力消費する。現在、米軍の核動力空母のみがこれを装備しつつある。しかし KDR が掌握した情報によれば、江南造船所で建造される空母は、通常動力型であるようだ。

興城艦載機パイロット訓練センターの規模は世界一であり、2本のスキージャンプ式飛行甲板と2セットの拘束装置を有している。全部で4+4本のアレスティングワ

イヤが設置されており、同時に 2 個飛行部隊の訓練が可能である。

KDR は、従来からその他の可能性を排除してなかった。それは、江南造船所がソ連の 3 番目の空母 URIYANOVSK 号を真似ることである。すなわちスキージャンプ台とカタパルト装置を同時に装備する可能性である。その理由はカタパルト装置の信頼性が低いからである。これは重大問題である。

興城に建設されたカタパルト装置の動向から、この技術の試験はすでに終了し、訓練段階に入ったように見える。工事は 2014 年に開始され、2015 年に工事が加速し、2016 年に完成し、2017 年に中国海軍はカタパルト装置を使用した発進訓練が可能になる。パイロットにとって、カタパルト発進とスキージャンプ発進では操縦技術が完全に異なる。艦載機 J-15 は、いずれの方法でも発進できるようになるはずだ。カタパルト発進を利用する場合、J-15 は全ての武器、少なくとも 8 トンの武器を搭載できる。しかしスキージャンプ発進を利用する場合、J-15 は 2.5 トン以下の武器しか搭載できない、と KDR は推測している。

このほか、興城のカタパルト発進訓練装置を利用することによって、Y-7 を基礎に改装した JZY-01 型早期警戒試験機の試験が可能になる。この機体は 5 年以上前から存在し、閩良においてエアロダイナミクス試験が行われてきた可能性がある。全面的な試験飛行は未だ行われておらず、カタパルト訓練装置完成後、今後 2 年以内に、レーダー試験及びカタパルト発進試験用に 2 番目の JZY-01 が製作されるかどうか？注目しなければならない。

権威筋によると、JZY-01 の使用するフェーズド・アレイ・レーダーの論証はすでに終了したという。しかし E-2C に比べると、Y-7 はサイズが相当大きい。1 番目の JZY-01 論証機は折畳み翼でなく、次の段階の開発重点が折畳み翼技術であることを示している。機体の長さは 29.2 M (E-2C は 17.6 M)、高さ 8.55 M (E-2C は 5.58 M)、翼幅 29.2 M (E-2C は 24.56 M) である。Y-7 の最大離陸重量は 21.8 トン、空虚重量は 14.9 トンである。

したがって JZY-01/Y-7 早期警戒試験機は概念論証機であり、空母搭載の可能性は低いと KDR は判断している。このような大型機は、エレベーターを如何に建造するか？甲板に係留するとしても大きなスペースを占有する。しかも 4 機搭載は不可能だ。次の段階で、第 3 艘目の空母にはどんな早期警戒機を載せるのか？注目すべきである。現在、適合する機種はなく、このため JZY-01 が長年試験段階に入れなかったのであろう。

海軍造船工業界の権威筋は：2014 年 12 月まで江南空母の最終設計図が承認を受けられなかった、と述べた。その理由は、例えば、搭載する早期警戒機を何にするか？等々、多くの技術的妥協（すり合わせ）のためであった可能性がある。

しかしこの点だけは確定している。すなわち一旦江南空母が、蒸気であろうと電磁であろうとカタパルトを装備すれば、J-15 の武器搭載が制限を受けないということだ。対艦ミッション時、少なくとも 4 発の空対艦ミサイルを携行でき、対空ミッションの場合、8 乃至 10 発の中距離/遠距離空対空ミサイルを携行できる。戦闘力は”

遼寧”や大連で建造中の空母に搭載する J-15 に比べ 2 乃至 3 倍になる。理論上、J-20 の搭載も可能である。

カタパルトの試験が正式に開始されると、J-20 の艦載に関する論争が激烈になるであろう。KDR は、J20 の処女飛行の場面に注目した。習近平が自ら儀式に参加しただけでなく、海空軍の高級将領がみな参加した。J-20 は海軍の関心を引いたと見ることが出来る。したがってカタパルトの試験が順調に進展したならば、J-20 の艦載型の論証が加速する可能性が極めて高い。或いは、原型機の製造に入るかもしれない。このような状況下で、過渡期の艦載機として J-15 が使用される期間は更に短くなるであろう。J-31 は艦載機になりうるか？海軍は元々投資していないので可能性は小さい。

以上